

第2回「OPEN！みんなで話そう！やまさき市長とともに」概要

日 時	令和4年3月19日（土）14：00～15：30
場 所	中央公民館 204 学習室
テーマ	「災害時要援護者支援制度について」
出席者	市民12名 山崎市長、健康福祉部職員3名、市民交流部職員4名

1 開会

- (1) 市長挨拶
- (2) 本日の流れについての説明

2 市民と市長との意見交換

- (1) 健康福祉部によるテーマの説明（20分程度）
- (2) 意見交換

ア【市民】自分の所属団体(障害当事者団体)で本制度の利用者は少ない。災害時は「自助」であり、近所の人に知らせるのは嫌という意見が多く、地域で生活する以上、そこをクリアするのは難しい。一人一人が地域とのコミュニケーションに対して前向きになることが大切。それぞれの団体に本制度を周知してほしい。

イ【市長】本制度をチラシなどでご案内しているが、「使いたい方」に知らせないと意味がないと感じた。当事者団体で良いやり方を話し、市側とも議論し、より使いやすい制度にすることも出来る。積極的に周知していきたい。

ウ【市民】自分が思う課題2点。1つは、個人情報を知られたくない人や、自治会未加入者がいること。自分の地域では、自治会未加入者は地域の民生委員が担当している。もう1つは、見守り側の地域の課題。責任感がある方は本制度について知ると、災害時には自分が助けなければ、と考える。また助ける相手を決めるなどシステムチックになることもある。民生委員が助けたことで犠牲になったケースがあると知り、驚く人もいるが、自分が助けに行ったことで、かえって危険な状態にすることを防ぐためにも、本制度の意味を正しく理解する必要がある。何度も周知し、個人レベルでの地道な活動が大切だと思う。

エ【市長】自身の情報を知らせることに不安を感じる人にこそ本制度を使ってもらいたい。できれば、信頼出来る人を地域に一人でも置いてほしい。必ずその人に援護をお願いするのではなく、その人から「このような援護者がいて心配だ」と伝えていただき、すぐに手助けが出来るような体制を整えていきたい。日頃から顔が見える関係性を作ることが大切。個人情報を外に出すのが怖い人もいると思うが、災害時に、情報が無いと助けに行けないと分かってもらう。地域の防災活動をされている方々は「人のため」だと考える人が多いが、その方が被災することもある。助ける相手を決めると、助ける側が被災した場合、

誰も助けに行けないため、誰もが動けるような状況、誰がそこに行くのか決められるようにしておくことが必要。本制度をみんなが使いやすい形にしていきたい。

オ【市民】「有料ボランティア制度」を提案したい。自分の自治会では高齢者の見守り活動を行っており、要援護者になるであろう高齢者が増加傾向にあるが、サポーターの成り手がいない。高齢者サポーターが見守り・介護支援を行った場合に、ポイント付与およびサポーターの介護保険料を軽減するというものがある。例えば、高齢者等の話し相手、散歩の補助、ゴミ出し、電球を取り換える等を行った場合に、それぞれポイントを付与し蓄積すると、換金される。このインセンティブにより後押しされ、参加者の増加を願ったもの。今後も広がる可能性がある。効果として①高齢者サポーターが増え、社会貢献という意欲を喚起する ②災害時の自助・共助を推進する ③健康寿命を延ばす＝元気な高齢者を増やす ④医療・介護費の削減 ⑤まちの活性化が進む。高齢者のためにローコスト推進策を実践することが、最大の方法で大きなメリットだと考える。

カ【健康福祉部】有償にすることで地域のつながりを作っていく、という理解でよろしいか。

キ【市民】災害時要援護者支援制度はなかなか定着しない制度だと思うが、正攻法だけでなく、ちょっとした方法でうまくいくと思う。元気な高齢者を使ってまちを元気にすることが最適。

ク【市長】国の制度を本市にどう活用していくか。“づか塾”の閉校式では、元気でさまざまな力を持った方が参加され、地域のために活動していくと話された。そのような方々が地域を支える活動をし、体を動かすことで健康寿命が長くなる。いいことばかりだと感じた。まだまだ元気で頑張れる人が、少ししんどくなった人を支える。ポイントによって頑張れる人にとっては良いが、一方で、それらを仕事にしている人もいる。バランスを考えながら、市としてどのような形でやっていくかを調査・研究し、検討していく。

ケ【市民】福祉施設で防災学習をし、参加者にアンケートを行った。災害時に自分の安全が確保できたうえで、周囲にどのような支援ができるかという質問項目で、40人中38~39人から「安否確認をしても構わない」と回答を得た。要援護者支援制度は「ものすごいこと」に取り掛かるようで説明が必要だが、個人の範囲であれば安否確認は構わない人も多数いるので、制度の大切さや目的を話し合い、どこまで手を差し伸べられるか考えると、取り組んでいきやすいと思う。自治会の中でこの制度に取り組むと、役員が代わるため継続は難しいが、安否確認はゴミステーションの範囲で磁石を貼り付けて行うことになっている。また正しい判断をするために、必ず「二人で」行って状況を見て、複数で判断するようにしている。

コ【市長】固い制度にすると責任やプレッシャーを感じる。一人で助けに行った人も被災することがあるので、必ず複数で行き、一人は助けを呼びに行く、一人は命が助かるように支えると聞いたことがある。制度の趣旨を理解してもらうため、柔らかい表現にし、「みんなが協力すること」がポイントだと分かりやすく伝える方法を考えてみる。

サ【健康福祉部】本市では「無事です手ぬぐい」を作製し、地域への個人情報提供に同意さ

れた方にお渡ししている。無事であれば手ぬぐいを外から見るところに掲げて、確認に
回る方が次に回れるようにするため作製したもの。

シ【市民】民生委員だが、本制度について以前アンケートを行った。民生委員では定着して
きている。要援護者はコロナ化での訪問を喜んでくれた人も多いが、本人が意識しておら
ず、「なぜ訪問に来たのか」や「民生委員が助けてくれる」という方がいた。要援護者に
なるであろう方々は増加傾向にあるが、家族がいる方もおられる。個人的に自分なりの尺
度で声がけをしている。アンケートで「一番必要だと思うこと」という項目では「声がけ」
「顔の見える関係」「ご近所同士の挨拶」という意見があった。このような関係づくりを
していくことが大切。本制度のチラシ配布があったが、チラシだけでは内容が掴み切れな
いという意見もあった。現役世代は仕事などで居住地にいない時間が多く、そういうとき
に何か起こった場合、自分たちは役に立たないと思い手を挙げられない。そういう方々が
何人かおられることをご近所に理解してもらい、自分がいるときには声がけをすること
から始めている。

ス【市長】災害時に災害対策本部が立ち上がり、市役所に集合し会議を始め、避難所を立ち
上げて物資調達について話し合うため公助は間に合わない。まずは自分で備蓄をし、助か
る道を頭に描いておいてほしい。災害は一步の違いで命が助かることもある。待つだけ
では助かる命も助からないことがある。皆で力を合わせないといけない極限の状態、出来
ることをする、地域の方の力も借りることが本制度の本来の趣旨だと思う。制度という
と難しく伝わるため、もう少し柔らかい表現で考えていく。

セ【市民】地域に要援護者が数名いて、毎年入れ替わり、新しい方に地域支援者を2名つけ
る。訪問し、希望の相手を尋ね、そのような方に「地域支援者になってほしい」とお願い
すると、了承いただける。こうして声をかけることが一番大切だと思う。要援護者のうち
境遇が似た方の個別計画を作成したところ、全員ハザードマップでは洪水・土砂災害もな
く、家も比較的新しいため「在宅避難」となった。避難所運営マニュアルを作成したが、
これは避難所に来た人が対象となるもの。在宅避難について地域で話そうとするが、テ
ーマが大きく「まずは避難所の話」となる。現実的に考えると多くの方が避難所への避難の
対象から外れる。避難所運営マニュアルを作成後、要援護者への対応について、行政から
手引きを示してもらいたい。災害時に想定されるマニュアルを作成し、その中に要援護者
への対応も入れていくといいのでは。

ソ【市長】支援の仕方は避難所以外にもあり、在宅避難が良い方には在宅避難をお願いして
いる。避難所の方は目で見えるが、在宅だと顔が見えず、人数や様子が分かりにくい。こ
のような方々にどのように手を差し伸べていくか考える必要がある。大雨の恐れがある
時、遠方に住む家族が、市内のホテルに先に避難させる方もおられる。避難には色々あり、
要援護者を支援するには、在宅避難のことも考える必要がある。

タ【健康福祉部】個別避難計画を作成した際、境遇が似ているご家族に集まっていた。近
所に住んでいる人同士で、関係づくりが出来て良かったと感じている。

チ【市民】マンション単位で本制度を利用出来ると良いと地域福祉課に聞いた。近隣の自治会から、要援護者がどのような支援を必要としているか聞くこと、普段から顔が見える関係性・信頼関係がないと助け合いは難しいこと、また私は近隣のマンションでボランティア活動をしているが、この活動をもう少し続けるといいとアドバイスを頂いた。自治会未加入者に対し、例えば防災面が良い繋がり作りのきっかけになるのではと考えたが、制度という、責任の問題や、信頼関係がないと個人情報を出してもらえないなど、色々な考えの中で葛藤した。「無事ですてぬぐい」は、レンタル可能なら防災訓練で試しに使って、本制度に同意すると貰えることが伝わる。他市ではマンション単位で「無事です」とドアに貼るところもある。制度にするとこのようなメリットがあることを分かりやすくしてもらいたい。

ツ【市長】実際、救助の経緯を体感すると、本制度に同意しておこうと感じる人もいる。自分のマンションの理事会で防災の話があり、備蓄品の説明はあったが、高齢者の部屋の場所や、災害時の安否確認の方法については無かったと反省した。マンション単位で良い点は、周囲の状況がなんとなく分かること。自分の部屋の被災具合によって、他の部屋の状況も分かる。てぬぐいは今後レンタルできるようにする。

テ【市民】自治会に加入しているが、仕事のため地域について詳しくなかった。防災に携わるようになって、地域の人に目を向けるようになり、近所同士の関係性やトラブルもあるため、近所での助け合いを重く感じていたが、近所でなくても、何軒か先の高齢者と仲良くするなどでも良いと感じた。まずは顔見知りになり、「あそこの人は頼れる」とか声かけするような関係性を作っていけたら良い。働いている若い方は災害や制度に対して他人事。障害がある方は災害時に近所の方に助けてもらわないといけませんが、災害時にだけ助けてほしいというのは違うと思う。普段から地域の方と顔見知りになり、何かあったときに相談できる存在になりたいと思い、災害について興味を持つきっかけ作りのために活動している。民生委員は一人で何人も抱えていて大変というのを聞いて初めて分かった。そういう話を働く若者に伝えていき、興味を持ってもらいたい。まずは興味を持ってもらわないと、広報しても流される。どこかで耳にしていれば、前に聞いた話だと思ってもらえるため、そういう小さいことから伝えていきたい。

ト【市長】避難時に知的障碍の方が心配。少し環境や雰囲気が変わったりするとしんどくなってしまうため、慣れた施設で避難出来ると良いと思った。避難所も受け入れ人数に限度があり、十分な環境ではないこともあるので、よりよい環境の施設が受け入れてくださるのはありがたい。助けてもらい感謝されることで、助けた方も嬉しくなる。お互いそう思えるのが「共助」だと思う。

ナ【市民】地域の方、自治会の方と一緒に個別避難計画を作った。その中で、本制度の大切さを感じ、自分自身も防災に対する意識が非常に高くなった。精神的に不安を抱えている方に本制度を伝えると、自分は同意しないという意見だった。人と会うことに不安を感じたり、関係を作ることが苦手という理由だった。同意を取り下げた家庭は、周囲と一緒に

というのが難しいといわれた。必要とされている方々が本制度を使いたいと思えるよう、行政と一緒に啓発活動に取り組んでいきたい。

ニ【市長】これまでの話でも感じたが、「普段から顔が見える関係」はとても大切。安心して登録できるよう、同意取り下げについて、問題点を受け止めて制度の運用をしていきたい。

又【市民】大学のゼミで要配慮者について話し合っている。今回の話を持ち帰って大学で話し合っていきたい。

ネ【市長】話し合った結果、良いアイデアが出たら、市に教えてもらえればと思う。

ノ【市民】ゼミで要配慮者について研究を始めたきっかけは、理学療法士の立場で、要配慮者が持っている障害や、必要としていることを学生に理解してもらうため。制度自体で人を助けることは出来ない。目の前の近所の方、家族、人と人の関わりの中で助け合う。そのような方々がどれだけ地域にいるのか、安否確認が出来るのか、要支援者への最適な接し方などは制度の中で出来ると思うが、最終的にはコミュニティの中で助け合うことが一番大きな問題。都会はコミュニティが狭くなるが、地域のイベントを通じて身近な人との付き合いを広げていくこと。今回のテーマである啓発・周知については二つある。一つは、一般の方々への啓発。もう一つは要配慮者に対する啓発。同意者が少ないと、助けてくれるのか不安に感じるだろうし、理解すらできないと思う方もいるため、そのあたりの啓発が重要だと思う。地域リハ（病院から地域に戻す）との連携、情報共有しながら啓発していくことも良いと思う。

ハ【市長】本制度を利用したいと思える形にするため、これからもご指導いただきたい。

ヒ【市民】本制度への取り組みについて、自治会でまだ始めたばかり。自治会付近のマンションでは、ドアにマグネットで「避難しました」・「今安全です」と安否確認出来るようにしてある。各自治会で悩みを抱えながら続けていると感じた。

フ【市長】自治会活動の中で防災のこと、本制度のことをやってもらっているのが一番ありがたい。自治会は市民に一番近いところにいる。

ヘ【健康福祉部】貴重な意見をご提案いただきありがたい。何かあれば地域福祉課にいつでも来ていただき、いつでも話が出来ればと思う。また地域の方にも伺う。

3 閉会

(1) 市長挨拶

(2) 事務連絡（アンケートの協力依頼）

以上